

M. F. デントンの第1回賜暇休暇（サバティカル） 1900/3～1901/9

—その目的と成果を検証する—

坂本 清音
八木谷涼子

はじめに

一般的に言って、どの派の伝道局においても賜暇休暇（サバティカル）の制度は重要な項目のひとつとして扱われている。なぜならストレスの多い異国でキリスト教伝道に携わる派遣宣教師にとって、賜暇は必要不可欠のものだからだ。伝道局によって、そのルールには幅があるようだが、アメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions. 以下、場合に応じて ABCFM、ボード、日本ミッション、ステーションとも記述）の場合も、1912年に出版された『伝道局便覧』⁽¹⁾の13章 Furloughs の冒頭で「宣教師の任期が5年と定められているアフリカ・ミンダナオ・ミクロネシアを除いて、海外宣教師の正規の統一期間は7年とする」と明記されており、次の条項で「現地での通常の任務を終えると、1年（実質14ヶ月）を帰国して休暇を過ごすことができる（その期間はそれぞれのミッションの夏期休暇期間であり、アメリカで過ごすことが望ましい）」と、期間・場所等が示されている。この furlough は上述のサバティカルと同一の意味である。

ところが1888年来日したメアリー・フローレンス・デントン（Mary Florence Denton 1857-1947）の場合、その間「同志社騒動」⁽²⁾でステーションの移動があったこともあるが、第1回のサバティカルを申請するのは、来日より12年後の1900年である。さらに、彼女の60年⁽³⁾に及ぶ滞日期間中にサバティカルを取るのは今回と1917～18年の2回だけ、という頻

度（少なさ）であった⁽⁴⁾（ちなみに、滞日50年を超える同志社関係宣教師で、賜暇が2回のみというのは彼女のほかにはD. W. ラーネッド⁽⁵⁾しかいない）。しかもデントンの場合、サバティカル本来の目的とは異なる賜暇を過ごし、かつ1回目と2回目とで成果も大いに異なっていたことが判明した。今回はそのうち、1回目の賜暇を扱うことにする。

資料としては、当該期間の『同志社女学校期報』（以下『期報』と略記）、同志社大学図書館所蔵マイクロフィルム *Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions* のデントン関連書簡⁽⁶⁾、*Life and Light for Woman* (Woman's Board of Missions 機関誌。以下 *L&L* と略記)、*The Pacific* (以下 *Pacific* と略記) の記事を主に利用した。上記は関係者向けの資料であるが、このほかに同時代の *Directory* や国勢調査、現地の新聞等も参照した。とくに新聞記事を存分に活用できたことは、この種の研究としては新しい試みといえるかもしれない。

[I] 第1回サバティカルに旅立つ前の状況

I-1. 「同志社騒動」後の混沌状態

1888年11月6日発行の『国民之友』34号を皮切りに、大学設立義捐金募集活動が始まり、新島自身も命を賭けて募金活動に邁進していた最中の1890年1月23日に、新島は大磯で息を引き取った。彼の死により、「千里の志」が未完に終わり痛恨の出来事になっただけでなく、生前からあった熊本バンドとアメリカン・ボードとの対立が決定的な溝となり、いわゆる「同志社騒動」と呼ばれる事件を引き起こした。

それは第2代小崎弘道校長時代（1892/3～1897/4）に始まり、第3代横井時雄校長時代（1897/5～1899/2）にさらに険悪になるのであるが、争点は資産問題（宣教師館の使用と同志社病院と看病婦学校の管理権）と教育問題（学校として「信仰の告白」をすべきかを巡って）であった。1895年、ボード本部から派遣委員4名が来日、同志社当局と交渉を開始するが、その報告書をめぐって両者はさらに対立を深め、ついに同志社側はボードの

寄付金及び宣教師教員の謝絶を宣言。一方、宣教師側は1896年の年会で全員同志社辞任を決議、同志社は開学以来初めて、外国人教師不在の時期を迎える。翌1897年にいよいよ寄付金が途絶えると、経営難から同志社(第3代横井時雄校長時代)は中学校令に準拠した尋常中学校を発足。さらに徴兵猶予の特典許可を得るために社員会が「同志社通則」綱領の削除を決議・実行に及ぶや、校友会とボードからは強い抗議の声が上がった。結局1898年、ボード側が訴訟に持ち込む準備を始めた矢先、社員会が12月に総辞職するという形で収束した。

双方が「騒動」を沈静化すべく、「綱領」復元を決めた新社員会を発足させ、外部からの社長⁽⁷⁾を初めて招聘することでなんとかこの苦境を乗り越える——デントンのサバティカルが浮上する1899年は、そのような過渡期にあったのである。

1-2. 「同志社騒動」が女学校とデントンに及ぼした影響 〈女学校は別〉との考え)

振り返ってみると、同志社女学校でも「同志社女学校騒動」とも言いうる「同志社女学校明治18年事件」⁽⁸⁾を経験していた。それは1885年、第2代「校長」⁽⁹⁾A. Y. デイヴィス⁽¹⁰⁾の時代に女性宣教師「校長」の権限をめぐってボード側と日本人男性教師との見方の違いから生じた衝突であったが、両者の交渉が決裂すると、「同志社騒動」と同じくミッションの年会で、女学校から女性宣教師引き上げが決められた。

この事件は宣教師文書研究が始まるまでは、『同志社九十年小史』の「創立後日なお浅い女学校を見舞った最初・最大の危機」で、「学校運営における日本人教師の主権を確立した画期的な事件」(251)という評価が定着していた。ただし、残された宣教師文書の検討が進んだ現在、この事件は両者が互いに反省し、歩み寄るかたちで収束したことが判明している。

半年後に女学校は再開し、ミッションと学校は関係修復に向かった。1886年に着任した第3代「校長」V. A. クラークソン⁽¹¹⁾は、大きな指導力

を發揮した。彼女が結婚で引退した後、1888年に第4代「校長」となったF. ホワイト⁽¹²⁾は、これまでの中等教育だけでなく、より高度なレベルの課程を設置する試みに取り組む。具体的には1890年、女学校に松浦政泰が赴任したことにより、女学校に「専門科」が開設（1892）され、学外からの応募者を迎えて前途洋々の感さえあった。

こうした順風のさなかに「騒動」が起こったのである。だが、「女学校は別」との考えが同志社内でもボードでも共有されていた。その結果、渦中にあった小崎校長が辞任して同志社を去った1897年にも、女学校では「二十年期記念式」を正面に金屏風を張り巡らして盛大に祝い（『期報』8, 1897, 8-9）、翌年には「殊に女学校の如きは別乾坤を開き居ることとて、別に何等の影響も受けざりき」と報告されていた（同10, 1898, 2）。

〈外に出たデントン〉

しかしながら1896年の年会で宣教師は全員同志社を離れることが決議されたため、デントンもやむなく女学校を出て「宣教活動」に従事した。その間のデントンの活動については、坂本清音「ミス・デントンが生涯のミッション地を同志社女学校と定めるまで」（『同志社談叢』36 [2016], 56-61）ですでに扱ったので繰り返さないが、梨木町ベリー邸・東京グリーン邸・鳥取ステーションと居住地点を移しながら、彼女はいわゆる外に出たの宣教活動と関わっていくことになる。

直接関わった活動を伝道地別に見ると、①京都では出町幼稚園の開園と、日曜学校や女性を対象とした教室「弘道館」の開設（約7ヶ月）。②東京では番町教会を足場に、D. C. グリーンの後を継いだ社会福祉事業「キングスレー館」への協力と、フレーベル幼児教育の実践を目指す「双葉幼稚園」開設のための募金活動（約1年半）。③最後の鳥取は、デントンが京都を出る前から、次の任地として日本ミッションで決められていた伝道地であったのだが、この地でいわゆる日本社会の底辺に潜む様々な問題に直面することになる（約1年）。彼女が日本を出国後、鳥取ステーション所

属と紹介されるのは、当初の取り決め故である。この3年余はデントンが同志社女学校を出ることを余儀なくされた故の社会生活体験であったが、サバティカル中の講演で視野の広い日本観を紹介するのに大いに役立ったことは後で見る通りである。

特に東京時代のデントンの活躍は、L&Lで以下のように評価された。「いまは東京でグリーンの賜暇の穴埋めをするため、慈善と社会事業と、厳密に伝道の仕事をしているが、デントンは社会事業に特に向いており、ミッション中の信頼を得ている」(L&L, 1898/2, 87)。さらに1年後には、具体的に「東京のデントンほど忙しい人はいない。教える・講義をする・矯風活動・家庭内の救護活動・大学隣保館活動〔…〕同窓会支部の会合を自宅で開いてもてなす。1時間汽車に乗って横浜へ行き、定期的に会合を開いて伝道の仕事をする。これが彼女の日常である」(ibid., 1899/2, 85)と、いかに活気に溢れ充実した日々であるかが語られる。

以上のデントンの日常を考慮に入れるとき、第1回のサバティカルを前にして、デントンの目標がもはや同志社女学校一辺倒でなく、時代の要求を先取りしつつ、かつ広く日本社会を見通すキリスト教活動(伝道)に向かっており、働き場所として活気あふれる東京が視野に入っていたとしても不思議ではない。実際に、デントンがまだ鳥取ステーションにいた1899年9月15日、ボード幹事のバートン⁽¹³⁾に以下のような書簡を送っていた。「私はとにかく勉強をしたいのです。世の中の動きについて行きたいですし、もし東京で仕事をするようになるなら、なおのこと時代の思潮に通じていなければなりません。バートン様ならここ日本での状況や私の限界をご存知でしょうから、本国での休暇の時間を無駄なく過ごせるようにして下さるものと信じております」⁽¹⁴⁾。このように、サバティカルに向けてのデントンの思いは帰日後の宣教活動に備えての自己研修が第一であった。休養期間としての賜暇というよりは、これから自分に何ができるかを模索する1年間であり、今この時期、母国でないとできない研修に邁

進めることであった。

〈デントン不在中の女学校の変容〉

サバティカルを前にデントンは久しぶりに古巣に戻り、3月3日には懐かしい女学校応接間で教え子30名に囲まれた。同月5日には大阪同窓会員、10日には神戸同窓会員による送別会がそれぞれの地で開かれもした（『期報』14, 1900/6, 1-2）。ところが、休暇の日程を1年延期して、女学校の再建に手を貸してくれと懇願されるほど、当時の女学校は切羽詰った状況にあった⁽¹⁵⁾。

騒動の間に全校生数はこれまでの3桁から2桁に下がって、4～50名止まり。ボードからの寄付金の謝絶により、校舎の修理もままならず、伝統ある女学校最初の校舎もかなり荒廃していた。

実際1900年2月発行の『期報』13号（4-5）には、「宣教師会と女学校」と「理事会と女学校」の興味深い2項目が並んでいる。前者では、1899年7月に神戸で開かれた宣教師会議で、同志社女学校に「年壹千円〔引用者注：500ドル〕の補助と女教師二名の送付をアメリカン・ボード婦人部〔ウーマンズ・ボード〕に請求することを、満場一致にて決議」との報告が記載され、宣教師諸氏の行為に感謝せざるを得ないと付記されている。海外諸国の要求はそれぞれの国の各ステーションから出される要求を全国組織のミッションの承認を得てから、本国の諮問委員会に送られるという手順があったので、日本のミッション会議で認められたことはどんなにか心丈夫だったことだろう。また後者では、改革後第2回目の理事会席上で、松浦教頭より女学校廃止案の噂が広まっていることに対する不安の訴えを聞くや、理事会としては「たとえ米国から補助が来なくても、女学校は必ず維持する」と、やはり満場一致で議決されたことを伝え「我等が喜涙に咽ぶ所なり」と報告されている。

〔II〕 第1回サバティカルの目的と成果の検証

II-1. サバティカルの目的

上記のような状況のなかで日本を離れたデントンは、本国で何をしたいと考えていたのだろうか。以下の3つの心づもりがあったと想定して論を進めたい。

- 1) 同志社女学校再建のために、ボード本部と日本ミッションの間で合意された案件、すなわち、年間500ドルの資金援助と女性宣教師2名の派遣を一歩でも促進させること。
- 2) ボストンで研究と社会勉強をすること。
- 3) 自分を日本に送り出してくれている Woman's Board of Missions for the Pacific (以下 WBMP と略) のメンバーに直接感謝を伝え、日本での状況を報告すること。

この3点のうち、1) と 2) は出国前から、バートン宛書簡の中で何度も明言されていた。一方 3) に関しては、デントン自身ここまで徹底して実行できるとは予期していなかったかもしれない。しかしこれこそが、後で見ると、第1回サバティカルの最大の成果となるのである。

以上のことを踏まえつつ、デントンが第1回サバティカルに日本を出立してから再び同志社女学校に帰ってくるまでの旅程を概観し、それぞれの時期のデントンの働きを辿ることから始める。

II-2. サバティカル中のデントンの足取り——地域別の働き

まず、新聞検索で明確になった船の情報である。1900年3月21日、Occidental and Oriental Steamship Co. の蒸気船ドーリック号 (Doric) に乗り、A. P. アダムス⁽¹⁶⁾ と2人の教え子〔松田幸と豊田谷子⁽¹⁷⁾〕同伴で横浜港を出帆した。船は3月30日午後10時頃にハワイのホノルルに到着、一行はしばらくハワイに滞在する。そして豊田をのぞく3名は、4月10日に入港してきた東洋汽船会社の日本丸に乗り換えて、17日午前サンフランシスコ (以下、適宜 SF と略) に到着した⁽¹⁸⁾。

当時デントンの父は没して久しく、母と妹ジョーイ、弟のうち2人はサンノゼ（サンフランシスコの南東80キロ）に住んでいた⁽¹⁹⁾。デントンはまずこれらの身内を訪ね、滞在したと推定される。そして4月の末にオレゴン州ポートランドに向かった。

なぜポートランドから始めたのかといえば、運賃の関係だった。切符を横浜から購入すると、サンフランシスコ行きも、そこからさらに50時間かかるポートランド行きも、運賃が同額だったのである⁽²⁰⁾。儉約家のデントンらしい発想といえる。

以下にデントンの足取りを、大体の期間と場所ごとにまとめておく。

〈1900年5月～6月〉（約1ヶ月）——主としてオレゴン州とワシントン州

デントンの報告会（講演）は、5月4日に始まった。現地の人が見つけてくれた家庭⁽²¹⁾に厄介になりながら、主に会衆派教会を会場に、WBMPの婦人たちや宣教に関心のある人びとと直接に交流した。

アメリカに到着する前から現地スタッフに手紙を書いて、特に西北部のWBMP支部訪問の予定作成を依頼⁽²²⁾していたおかげで、デントンはポートランドに到着後の1ヶ月間、オレゴン州とワシントン州で46回もの講演⁽²³⁾をすることができた。

そのことをデントンのアメリカ到着後第1便で知ったバートンは、大慌てで「1、2ヶ月の完全休暇をとることはできませんか!」「デントンさんには一定の期間、精神的にも肉体的にも完全にリラックスできる休暇を、静かな場所でぜひとも取っていただきたいのです」⁽²⁴⁾と訴えている。しかし、前述のごとく、彼女のサバティカル中の目的はこうした報告にあったのだから、それを止めることはできなかった。

北西部の婦人たちにとって、デントンから聞く東洋の国日本の話は大変興味深く、東部に較べるとまだまだ劣っていた宣教意識の高揚に役立ったに違いない。その手応えはデントン自身も驚くほどであった。

〈1900年6月初旬～9月〉(約4ヶ月)——SFを中心にカリフォルニア州北部

次に向かったサンフランシスコ・オークランドを中心とする北カリフォルニアは、北西部と異なり合衆国西部の文化の中心地であった。この時期の活動は、6月6日にオークランドの第一会衆派教会で行われたWBMPのQuarterly Meetingに出席し、初めて正式の挨拶をすることから始まる。内容は、支援者の皆さまに会えて嬉しいが、日本で仕事を離れていることを申し訳なく思う。デントンにとってWBMPはとても大切な存在で、宣教師として送り出してくれていることにまず感謝したい。自分は苦勞したことは全くなく、素敵で楽な時間を過ごしていると述べ、次いで、女学校での毎日の生活を事細かに語り、女生徒は信頼に足ること、良心的で無私に思えること、日本人クリスチャンはみな伝道者になることなどだった⁽²⁵⁾。

この期間中も精力的に支部のメンバーに出会うこと、先々で交流を深め講演をすることに多くの時間を費やす。最後は9月5日にサンフランシスコの第一教会で行われたWBMPの第28回年会で閉めくくった。その時話した日本伝道についての内容は「日本人の間には宗教がない。もはや仏教を信じていないが、キリスト教を信じる段階でもない。にもかかわらず日本には10万人のクリスチャンがいる。思うに現在留学中の日本人に伝道すれば、帰国後いい働きができるだろう。デントンなら彼らを教会に誘い放っておかない。宣教師は日本人に感謝されている」⁽²⁶⁾。最後に同志社女学校には宣教師2名の需要があることを忘れず訴えている。日本紹介の内容が北西部のときよりも広範囲になるだけでなく、現地にいる日本人の動静にも目が向いてきたことがわかる。

この期間中の7月2日からは、サンノゼの母親の許で2週間過ごす予定とデントンは書いている⁽²⁷⁾。この期のパートンとのやり取りの中で、東部行きに言及されているのは1900年7月21日付1回きりで、太平洋ウーマンズ・ボードから解放されれば、すぐにボストンへ行って休むつもりと記している⁽²⁸⁾。実際には、8月下旬までサンノゼ周辺での講演は続いた。

〈1900年9月～1901年4月〉（約7ヶ月）

——ロサンゼルスを中心にカリフォルニア州南部

南部に移ってからのデントンの人気はますます高まり、結局7ヶ月滞在することになるが、この期間中に4回ボストン行きを仄めかしている。いずれもバートン宛書簡⁽²⁹⁾。

- ① 1900/9/28 今、南カリフォルニア（以下、南カと略）にいるが、ここでの仕事は10月下旬に終わるので、すぐに南ルートでボストンへ行く予定。
- ② 1900/12/14 ここでの最後の講演依頼は1月9日なので、できるだけ早く東部へ行き、4月には帰日したい。
- ③ 1901/2/2 WBMPの準備してくれる講演会を東部へ行きたいからといって断るべきではないと思っているが、WBMPのご婦人方は自由に断っていいとのことなので、今のところ、2月6日を最終日とするつもり。
- ④ 1901/3/28 WBMP 南部地区の年会が4/10～12に開かれるので、終了直後の4月12日午後に出発する。

このようにデントンの東部行きはいつも後回しにされ、結局アメリカの地を踏んでから通算1年近くの歳月が経過してからようやく実現することになる。

繰り返しになるが、WBMP関係者に報告と感謝を伝えたいというデントンの信念はゆるがなかった。南カに移動してからも「要請があれば、1週間に2回でも、大小どんな集りにでも出かけて話します」と述べている⁽³⁰⁾。実際デントンの講演はおびただしい数にのぼったが、*Pacific*誌上で話題になるのはその話の中身というより、熱心さが主だった。

ただ1回だけ *Pacific* の記者がデントンの話す日本と日本国民の素晴らしさに共感して、コメントつきの要約を載せた号⁽³¹⁾がある。その内容は以

下のようなものだった。

アメリカにいてもこれまでは結婚した姉の家に居候して、甥姪の面倒を見るしか仕方がなかった独身女性が今や自分の部屋に住み、人の役に立ち尊厳ある生涯を送ることができる。そのような人が日本に行けば、安い生活費でアメリカにいるのと同じくらい快適で、教師として現地の人を教えることができるのに。〔…〕日本では「クリスチャンの先生の家です」という表札を掲げるだけで生徒は集まり、お料理を教えて下さいと婦人も来る、あえて日本語を学ぶ必要もない。日本ほど教育が尊重され、大学卒の男女の評判がいい国はない。日本では教育ある女性は広く世間に影響を与えることができ、知的な愛国者で、国民を向上させる強力な要因である。〔…〕日本人の質素な生活には学ぶことが多い。日本では表面の美しさが異教のおぞましさを覆い隠している。日本人は西洋文明を歓迎するが、道徳心を求めることには欠けている。キリスト教のない文明は塵埃に過ぎない。だから宣教師として日本へ行き、女子教育に関わってほしいとデントンは強く願っている。

このような説得法で、遠く離れた東洋の未知の国日本に宣教師として行こうと若い女性の心が動くか否か疑問だが、デントンが身近な例を出しながら、宣教師募集に懸命だったことはわかる。

予想外に長く止まることになった南カでの7ヶ月が、デントンにとっても WBMP の南部地区婦人会にとってもいかに有意義で心を通わす貴重な年月となったかは、最後の集会の情景を書き綴った *Pacific* の記事からも容易に想像できる。デントンが会長の呼びかけで壇上に上がると、「彼女の顔は苦痛で歪んだ。聴衆を目の前にすると感情を抑えようとする必死の努力も功をなさず、聞き手においては尚更であった。彼女は私たち全てにとって、とても愛しい人になっていたから (for she has become very

dear to us all)』と *Pacific* の記者は報じている⁽³²⁾。

余談だが、ボストン行きを巡っては土壇場になって断念しなければとデントンが思い始めた時期があった。それはバートンとの間で旅費の出所をめぐる問題⁽³³⁾が浮上した2月頃のことであるが、ボードの前副会長ジェームズ⁽³⁴⁾から旅費提供の申し出があって解決した。のちにこのジェームズの未亡人と息子が、氏の遺産から、同志社女学校を専門学校令による高等教育機関とする際に必要だった校舎「ジェームズ館」建立（1914.1.9 定礎式 8.20 竣工）のために2万ドルを寄付することになるのである。デントンとジェームズ一家のつながりは、その14年前から始まっていたことがわかる。

デントンの東部への旅は南ルート⁽³⁵⁾であった。松田幸を伴って4月の中旬に出発し、ルイジアナ州ニューオーリンズを經由して（4月16日泊⁽³⁶⁾）、鉄道で東へ向かった。

〈1901年4月初旬～7月〉（約4ヶ月）——ボストンを中心とした東部

いよいよ待ちに待ったボストンでの生活が始まった。デントンは「すぐに音楽学校に向かいます。日本人の若い女性を連れて行くことになっているのです」と書いた⁽³⁷⁾通り、まずは松田をボストンの私立音楽大学 New England Conservatory of Music に伴った。一緒の船でアメリカに上陸した松田は、デントンが西部で仕事をしている間は Mills College で音楽の勉強をしていた⁽³⁸⁾。その間も松田のことを気にかけていたデントンは、アメリカ到着後、雑誌 *Congregationalist*（1900/4/26）に掲載された「音楽と伝道」⁽³⁹⁾を読むとすぐさま著者の J. H. ロス⁽⁴⁰⁾に手紙を書いて、松田幸のニューイングランド音楽院入学の学費（1年間で500ドル）援助を願い出していた。

結果的に松田の同学院入学が可能となったのは、デントンからの唐突な願い出を受けたロスがフリーア⁽⁴¹⁾などボード関係者の保証が必要との返書を送った結果、最終的にはバートンのアドバイスも受けて、ロスを含めて支援者何人かからの寄付が集められたと考えられる⁽⁴²⁾。一方、デントンは

同学院のヘール教授⁽⁴³⁾とも連絡を取り、松田幸入学の可能性を問い合わせ、ヘール教授からは「暖かく迎える」との保証も得ていた。

この件以外で、ボストンにいる間の足取りが把握できる記事は極めて少ない。その少ない記事から2つ紹介しておく。ひとつは5月22日に the Union Church, South Weymouth, Mass. で開かれた WBM の Semi-annual Meeting (テーマは「外国伝道における教育の重要性」)において、午後の部にデントンが出席し、“The Boarding School: Its Effect on the Individual Pupil and on the Community” の題で話したという記事⁽⁴⁴⁾。同志社女学校の事例を引いてどんな話をしたか大変興味深いのが、残念ながら詳細不明である。

もうひとつは、5月29日アーモストの第一会衆派教会で開かれた WBM のハンプシャー郡支部の年会に出席したときの記事⁽⁴⁵⁾だ。その日に予定されていた中国派遣の宣教師欠席のため急遽の指名を受け、デントンは日本での伝道の様子を語った。その中でアーモスト大学卒業生の新島襄と内村鑑三を取り上げて、彼らの日本での仕事を紹介し高く評価したという。その話しぶりも天性のもので、聴衆を大いに喜ばせたとのことである。

最後に、デントンがボストン在住中に、WBM の役員クック夫人の別荘で約1ヶ月休養予定の知らせを受け取ったときのバートンの書簡⁽⁴⁶⁾が残っている。これまで何度もサバティカル中の休養を勧めていた彼にとっては、嬉しい報告だった。

しかしながら、デントンが東部を発った日付もはっきりしていない。L&L 8月号の宣教師消息欄〈missionary personals〉には、「先月〔7月〕、日本の京都同志社女学校に戻ることを期待してカリフォルニアの自宅に向かうデントンに別れを告げた」⁽⁴⁷⁾とあるだけだ。ただし帰路が北部のミネソタ州経由であったことは新聞記事から判明している。これについては III で触れる。

〈1901年8月～9月〉（約2ヶ月）——南カの故郷で過ごす

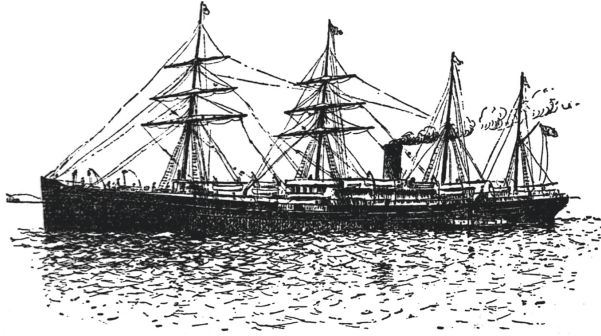
同志社大学所蔵のマイクロフィルムによると、第1回サバティカル中最後のものとなる C. H. ダニエルズ⁽⁴⁸⁾ の1901年7月25日付書簡に、デントンの住所は「1099 Sherman St., San Jose, California」と記されている。ここは妹ジョーイと母の住所であり、再び身内の家に身を寄せたことがわかる。

8月にも少なくとも2つの教会で講演し、WBMP 南部地区の集会にも顔を出していたようであるが、いよいよ最後の公式集会出席となるのは、1901年9月12日のWBMPの年会だった。そこでデントンは次のように語った。「予期しないうちに、2度も年会に出席することになって申し訳ない。ここの皆さんと出会って、これまで以上に実感していることは、〈宣教師〉の役割は一番いいところりで、海外伝道を支えてくださっている皆さんこそが、一番大変な部分を担っている。そう確信した」

「私たちにできることは沢山ある。日本は今世界中の宣教活動の中で、最も重要な時期に差し掛かっている。そのためにはもっと働き人が必要だ。日本人は一度説教を聞くとすぐに信じるが、その後のケアが必要。同志社女学校は25年前に創設され、今このボードで支援されている。現在早急に、大学出の宣教師が2名必要。日本女性をクリスチャンにすることは、日本をキリスト教国にすること。同志社女学校には伝道の仕事につきたいと願っている生徒が大勢いるのに、まだ踏み出すことができないでいる」と報告⁽⁴⁹⁾。最後にもう一度この地で与えられた全てに感謝し、これからも祈り続けることを請うた。

帰路⁽⁵⁰⁾ は、サンフランシスコを1901年9月20日に出港するドーリック号に乗船。9月26日ホノルル寄港、10月8日横浜到着、10月10日神戸着。翌11日には同志社女学校に帰り着き、大歓迎を受けた（『期報』17, 1901/12, 7）。結局、彼女のサバティカルは1900年3月に始まり1年半に及んだ。SF出港の6日後、ホノルル近くを運行中の船の中からデントン

が書き送ったハガキの全文が珍しく *Pacific* 誌上で紹介されている。“I have slept and slept and slept, … I shall go back happy in the real acquaintance I have with you all”⁽⁵¹⁾ の文面に、サバティカル中に WBMP のメンバー全てと持った時間の濃密さと満足感が出ていると言えよう。



デントンが乗船した英国の蒸気船ドーリック号 2,939 トン
(図版出典 *San Francisco Call*, 1901/9/21, 5)

II-3. 第1回サバティカルの総合的成果

先に挙げたデントンのサバティカルの心づもり3項目に照らして、それぞれの成果をまとめておく。言うまでもなく第一の目的は、同志社女学校の再建である。そのために1899年日本ミッション年会の決定事項としてボードに請求していた年間500ドルの援助金に関しては、1900年3月のデントン出国時には、まだ何の音沙汰もない状態だった。

〈年間500ドルの資金援助〉

この問題については、従来の慣行として女学校に関わる出費は全てウーマンズ・ボードが責任を持つことになることはわかっていた。ただ校舎のためとなると、同志社女学校最初の校舎はボストンに本部のあるWBMによってアメリカ独立100周年記念献金として建立されたという経緯があった。一方、現在同志社女学校の支援はWBMPに全面的に負うていたので、ボード本部としては、この費用はどちらのウーマンズ・ボードが引

き受けるかは当事者の考え次第と考えていた。そのことが支援の決定を送る返事が遅れていた一因かもしれない。

デントンにできることは、遠く離れた日本の京都で見てきたばかりの、同志社女学校の窮状を伝えることだった。というわけでアメリカ到着後の第1便⁽⁵²⁾で、今の女学校には校舎修理のためのお金が緊急に必要なこと、1900年9月に始まる新学期に備えて7月には助成金半年分の250ドルでも早急に送金してほしいと訴えている。デントンとしては帰米後のWBMPとの交わりを通して同志社側の要望が通るとの手応えを感じていたが、バートンからの連絡で、ボストンのWBMでも考慮中と聞いて、早速書記のミス・チャイルドに書簡を送り⁽⁵³⁾、上記の訴えを繰り返した。しかし9月28日の段階で、WBMからは年間500ドルの援助はできないとの返事が来た⁽⁵⁴⁾。

このような経緯を経た後で、WBMPから1900年度の500ドルの確約が得られたことがデントンに伝わった⁽⁵⁵⁾。その吉報は『期報』15号（1901/2）において大々的に伝えられている。この件に関しては、ともかく肩の荷を下ろすことができた。

〈2名の宣教師派遣〉

デントンにとって、帰日後ともに働く2名の女性宣教師獲得は援助金に劣らず重要な案件であり、滞米中にぜひとも見届けたい成果であった。残念ながら、この目的は達成できなかったが、彼女による4度のアプローチを紹介しておく。

1度目は、ワシントン州のワラワラ大学を訪ねた折りに出会ったペンローズ学長の令妹。彼女が引き受けてくれれば最適と早速バートンに知らせたが⁽⁵⁶⁾、結局叶わなかった。

2度目は、南カにいる間に見つけたMiss HeathとMiss Very。この件もすぐにバートン宛書簡で推薦した⁽⁵⁷⁾が、12月になっても返事がないので、デントンから催促をした。実は、この書簡はバートンがメキシコに出

張中に届き、秘書の不手際で決済済みになっていたことが判明した。早速幹事のダニエルズが兩人と連絡を取ったが、2月になっても返事はない。当事者からの応答がなければどうしようもなかった。

3度目。ボストンで宣教師候補の若い女性に会う予定があると新聞で報じられた⁽⁵⁸⁾。しかし東部でも結実には到らず。

4度目は、ダニエルズから送られてきた書簡⁽⁵⁹⁾に言及された候補者に希望をつないだ。2名の女性の名前が挙げられていたが、両者とも難しいという結論になった。

WBM や WBMP の年會に顔を出す度に、デントンがスピーチの中で宣教師候補者募集を必ず訴えたことは記録に残っているが、結局、名乗り出る人は一人もいなかったのである。現地で探せばきっと見つかると思っていたデントンには、きわめて不本意な結果となった。

〈ボストンでの研究と社会勉強〉

デントンはすでに帰国の前年から、ボストンでの勉強を心待ちにしていた⁽⁶⁰⁾。そこは「研究と社会勉強をするには、他のどの都市よりも利点がある」⁽⁶¹⁾場所だった。その当時、東京こそが自分の働き場と考えていたデントンには、いずれ東京で活かせる何かをボストンで見出せば、という期待があった。ところがいざボストン行きが近づくと、バートンとのやりとりに微妙な変化が現れた。

南カを発つ日程が確定的となった1901年3月28日付デントン書簡では、松田を学校に入れた後は、すぐにボストンの女子大の寮に滞在したいという希望をバートンに伝えている。「アメリカの大学の働きを内部から眺めてみたい」し、ボストン市内では、大学セツルメントにも1週間ほど滞在したい⁽⁶²⁾。これに対してバートンからは、ウェルズリーとマウントホリオーク大学なら、1週間ずつの手配の見込みはあるという返事が届いた。希望があれば、ウェルズリー大学と関係する学生セツルメント協会の

Denison House の視察も可能であるという⁽⁶³⁾。

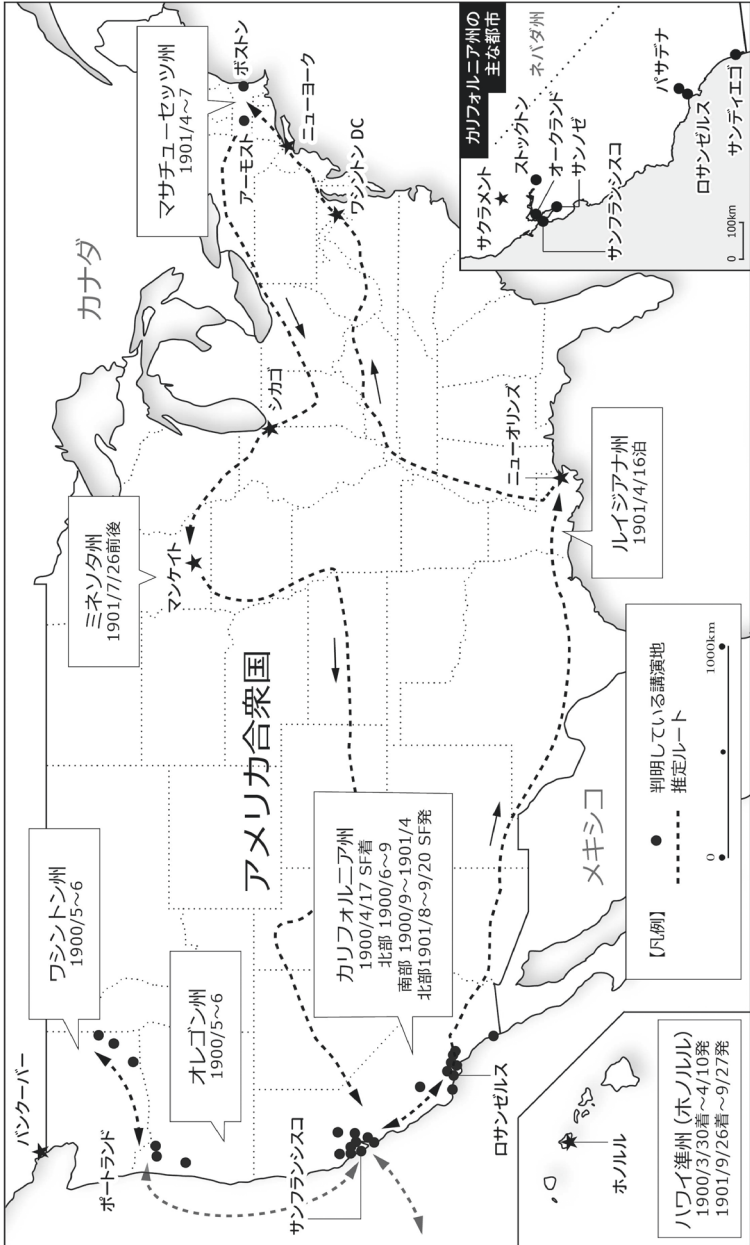
これらはすべて可能性を述べたものであり、現実はどう過ごしたかについては、今のところ資料が見つからない。ただし、以上のやり取りから推察すると、デントンがボストン行きの前に見ていたものは、東京での社会活動ではなく、京都で同志社の女子教育に携わりながら併行してできるセツルメント活動に変化していたように見うけられる。

〈WBMP のメンバーとの絶大な信頼関係〉

出国前のデントンの心づもりの中に、WBMP の支部をできるだけ訪問し、彼女の派遣を支援してくれている人々に直接感謝を伝え、日本での状況を報告したいという思いが強かったことは明らかである。しかし、これほどの反応があり、気持ちの通い合いがあり、絆の結束が可能になるとは本人も予想外だったのではないだろうか。

信頼関係の構築により、WBMP のメンバーたちにとって、日本はより身近な存在になった。たとえばデントンを東部へ送り出す南カの送別会では、「私たちの親愛なデントンに対する共感から、日本が眼前で生き生きと息づいている国になった」⁽⁶⁴⁾との感想が述べられている。

先に II-2 で見た通り、どの時期にもどの場所でも、彼女は出会う人々に誠心誠意向き合い、交わった。デントンは自分のためには何ひとつ求めない。ただ学校のため、日本のクリスチャンのために懇願する。彼女は自分自身も、彼女の生活も、彼女の全てを宣教の仕事に捧げている⁽⁶⁵⁾。そのことが全面的に WBMP の人々に伝わったことは、期せずして得られた成果と言えよう。



M. F. デントン 1900~1901年サバティカルの旅程と講演地

[III] 新聞に現れたデントン

ここからは角度を変えて、一般の新聞においてデントンがどう記載されたかを見ていくことにする。

テレビもラジオもない当時、新聞は情報の伝達機関として市民生活にきわめて重要な位置を占めていた。すべては狭いエリアで講読される地方紙であり、住民の個人動向や、地域の教会情報をつとめて掲載していた。

〈概略〉

紙面にデントンの名前が見えるのは、講演の告知、そしてその反響記事が主である。発見できた100本強の記事の発行地はカリフォルニア州が最も多く、7割を占める。次にオレゴン、マサチューセッツ、ワシントン、ハワイと続く。滞在期間に正比例しているといえよう。

講演した都市ではロサンゼルスが最多で、ここは最も滞在が長かった場所だった。来日前の4年間をロサンゼルス近辺の学校に勤務し、多くの知友⁽⁶⁶⁾がいたことも関係していよう。

会場や主催者の所属は実に多彩であった。会衆派教会はむろんのこと、クリスチャン・チャーチ（ディサイプルス派）、長老派、聖公会、フレンズ教会（福音派クエーカーの教会）、ユニヴァーサリスト教会もあった。ロサンゼルスの聖公会エピファニー教会などは、新築されたホールのこけら落としがデントンの幻灯講演会であった⁽⁶⁷⁾。ほかにパシフィック大学女子寮、女性キリスト教禁酒同盟大会、エベル協会（女性向け教育慈善団体）、ロサンゼルス市教員総会、YMCA などがある。変わったところでは、1900年の夏から秋にかけてロサンゼルス市街に設営された「大天幕」（最大収容600名）での講演もあった。

〈デントンの話術〉

デントンの講演が好評を博したことは、早くもオレゴンで報じられている。西海岸を南下してからも、その評判は変わらなかった。いくつか紹介

してみよう。“a very entertaining talker”-“a most interesting speaker”
-“a pleasant speaker, bright and intelligent” -“Her vivid
description...brought the field clearly before her audience”⁽⁶⁸⁾ -

彼女の語り口は、シンプルで親しみやすいものだった。「[政治家や牧師
のような] 演説家ではないが、テーマに関してよく理解しており、会話調
で話すので、聴衆の関心をそらさない」というのはカリフォルニア州スト
ックトンでの評価である⁽⁶⁹⁾。このときは、女学校で料理を教えた体験から「い
ま日本ではストックトン産の小麦粉がどこでも手に入る。自分も学校で
使った」と語って会衆を喜ばせた。

〈幻灯機と日本グッズ〉

講演会場によっては、幻灯機によるスライド⁽⁷⁰⁾も上映された。すでに
1900年5月のオレゴンで stereopticon の言及がある。また、colored とい
う語も見えるので、着色したスライドも用いていたことがわかる。上述の
「大天幕」においても幻灯機が使われた。当時はこうした幻灯講演会が全
米で盛んに開催されており、教会でも同様だった。ただ東洋の光景はまだ
珍しかったはずで、デントン人気の一因となったかもしれない。

サンノゼやロサンゼルスでは物珍しい日本の美術品やグッズの展示も行
われた。日本風の装飾が施されたテーブルで軽食が振る舞われたり、An
Evening in Japan と題して、キモノをまとった芸人が登場するデントン監
修のイベントも企画された⁽⁷¹⁾。日本文化を伝える親善大使の役目も果たし
ていたことがわかる。

〈演題〉

テーマは「日本における宣教活動」が基本であった。講演を重ねるうち
に、「宣教活動を通じて見えた日本社会、特に女性問題」に軸足が移った
ように感じられる。

以下、いくつかの記事を具体的に紹介しよう。

【日本人教会で】 デントンは日本人の前でも講演した。ポートランドの日本人教会（責任者はメソジストの工藤陽太郎師）では、席を埋め尽くした青年たちを前に、キリスト者の日本男子として、西洋の善き部分をまなびとり、それを持ち帰って祖国に尽くすようにと励ました。退場の時に会衆から「ミス・デントン、万歳」の聲が沸き起ると、感激した彼女は「日本で12年の経験を積んだ者だけができる、丁寧な深いお辞儀をした」⁽⁷²⁾。

【デントンの語る日本】 在日12年のデントンは、日本のスペシャリストと受け止められた。その彼女が語った日本を、複数の記事⁽⁷³⁾から要約してみる。いわく――

- *キリスト教が日本にもたらした最高の贈り物は、同志社という学校である。日本では、同志社の卒業証書さえあれば、推薦状はいらないと言われるほどだ。
- *日本は地球上で最も文明化された国。12年前に日本に向かったとき、孤立や窮乏、そして迫害さえ覚悟していた。だがそれは杞憂だった。鉄道、電信、電話はアメリカと遜色なく便利で安価。日本の軍隊ほど組織化された軍隊は世界にない。それでいて、世界で最も不道德な国でもあるのが日本。
- *生まれながらの心の清らかさ、優しさ、家族への献身という点では、日本女性に及ぶ者はない。だが日本では女性は従属的な地位に置かれ、夫は妻を簡単に離縁できる。墮落した状態におかれた女性が何万人もいる。このような状況の打開には、高等教育と、高尚な西洋の娯楽、特に音楽を導入することが肝要。

【ミネソタでの再会】 “Miss Denton of Japan is visiting Mrs. Dr. James for a couple of days（日本のミス・デントンが医師ジェームズ夫人を数日間訪問中）” ——1901年7月にミネソタ州の地方紙⁽⁷⁴⁾に載ったこの短信から、意外な事実が明らかになった。ジェームズ夫人とは誰か。それはかつてのミス・フローレンス・ホワイト、すなわちデントンが同志社女学校で2年間補佐をし、数ヶ月にわたって献身的な看病をした第4代「校長」であっ

た。デントンは東部から西海岸に戻る途中、わざわざミネソタに足を延ばし、彼女と10年ぶりの（そしておそらくは生涯最後の）再会をしていたのである。

ホワイトは病を得て1891年にやむなく帰国したのち、メキシコ・ミッションに異動してグアダハラで働きを続けたが、1895年に宣教師を引退。同じ年、寡夫となっていた義兄のDr. John Henry James（1846-1929、眼科・耳鼻咽喉科医師）と結婚し、ミネソタのマンケイトで暮らしていた。1931年に84歳で永眠⁽⁷⁵⁾。デントンの記事を探したことで、ふたりの再会と、ホワイト元「校長」の消息が確認できたのは収穫であった。

【支援の広がり】 デントンの講演がおもわぬ働きに繋がった例を最後に紹介しておく。1900年8月、彼女は家族の住むサンノゼ周辺で精神的に演壇に立った。このとき刺激を受けたサンノゼの篤信の女性たちが日本伝道を支える会を立ち上げ、翌年9月には、特に米国人ホイットニー医師の運営する赤坂病院⁽⁷⁶⁾ならびに日本人看護婦養成のための献金、さらに病院へクリスマスプレゼントを送る呼びかけがなされていた。帰国間際に同会主催のお茶会へ招かれたデントンは、さぞや励まされたことだろう。会の活動がその後どうなったのかは残念ながら不明だが、ひとつだけ確認が取れたのは、会長のテイバー夫人の遺言状に、東京の赤坂病院の名が記されていたことだ。新聞が教えてくれたエピソードである⁽⁷⁷⁾。

おわりに

以上、デントンの第1回サバティカルの目的と成果を、出国前の状況から、滞米中の足取りを丹念に辿りつつ明らかにした。通常サバティカルは休息の年月であるので、記録が残ることは稀有なことである。しかしデントンの場合は確たる目的を持って移動しつつ講演を続けたことが幸いした。しかも、それがいわゆる内部資料とみなされるボード関連の出版物だけでなく、近年急速にデジタル化が進んできた各種新聞記事の中でも見つけられたことで、より一層サバティカル中のデントンの姿を浮き彫りに出来た

といえる。その姿は、日本国内の動きを辿っただけでは、決して見ることでできなかったデントンの別の顔だった。

デントンが初回のサバティカルで挙げた成果として特記すべきは、数多くの WBMP 支部を訪問してメンバーたちに直接感謝の念を伝えたことで、揺るぎない信頼関係を築いたことである。その絆はデントンが生きている限り続き、その後の同志社女学校のキャンパス整備と女性宣教師の派遣支援を支える柱石となった。往路の船では2人の卒業生豊田谷子と松田幸を伴い、それぞれの渡航目的の成就を応援したのも、生徒思いのデントンならではの行為であった。

また、これまで日本ではまったく知られることのなかった〈人気講演家デントン〉の姿が、新聞記事を通して明らかになったことは興味深かった。その講演回数の多さは、デントンが「皆の前で話したい」という強い意志を持っていたこと、そしてマネージメントをした WBMP の力、また評判が評判を呼ぶ相乗効果の結果といえよう。

執筆は、III 章をのぞき坂本が担当した。ただし、新聞記事や人物情報に関する部分は八木谷が補った。また、地図は八木谷が作成した。

(注)

- (1) *Handbook for Missions and Missionaries of the American Board of Commissioners for Foreign Missions*, 1912.
- (2) 同志社騒動：新島亡き後の同志社（主として熊本バンド卒業生）vs. アメリカン・ボードとの諍い。I-1 で後述。『同志社 百年史』通史編1「キリスト教主義学校同志社の苦悩」430-61 及び「外国人の財産権問題」462-76 に詳しい。
- (3) 60年の在日期間は1888～1947年であるが、デントンは1928年7月1日付でアメリカン・ボード宣教師の定年（70歳）を迎え、以後は引退生活に入った（*Mission Register*, p. 100）。この年に定年となったのは、彼女が生前、日本ミッションに対して1858年を生年と届けていたためである。デントンの生年には混乱があり、同志社の記録では1859年、パスポートには1857年とあるが、現在では1857年7月4日が誕生年月日と確定している（坂本清音「M. F. デントンに関する新資

- 料——遺言・死後叙勲・生年について」『同志社談叢』29 [2009]、118-129 参照)。
- (4) サバティカルではないが、デントンは1891年に短期帰国したことがある。日本旅行中に横浜で急死した親族 (Mrs. J. H. Strobridge) の遺体と、同道していた娘をカリフォルニアに送り届けたもので、もちろん私費による帰国であった。10月7日に横浜出港、本国滞在2週間、11月22日に横浜帰着という慌ただしさのなかで、デントンは10月31日にサンノゼで日本宣教について語る機会を持っている。教会関係者の私邸で、限られた招待客を前にしてのものではあったが、それが彼女のアメリカにおける講演デビューとなった (*The Japan Weekly Mail*, 1891/10/10, 421, 446; *ibid.*, 1891/11/28, 662; *San Francisco Chronicle*, 1891/10/22, 6; *San Jose Mercury News*, 1891/11/8, 6; *San Jose Herald*, 1891/11/9, 3)。
- (5) Dwight Whitney Learned (1848-1943) のサバティカルは、第1回が1892/6~1893/12、第2回が1910/3~1911/3 (帰国は1928年、80歳)。
- (6) 書簡の翻訳は同志社女子大学英語英文学会誌 *Asphodel* 49~56号 (2014~2022) に収録されている。以後書簡の出典は、例えば D [enton] → B [arton], 日付, *Asphodel* 号数 (初出時のみ刊行年), 頁の順とする。
- (7) 高知県出身の二人。第4代社長西原清東(1900~1901)、第5代社長片岡健吉(1901~1904)。
- (8) 『同志社九十年小史』1965, 250; 坂本清音「アメリカン・ボードの側から見た同志社女学校『明治18年事件』」, 『総合文化研究所紀要』10, 同志社女子大学1993, 119-130 参照。
- (9) 宣教師文書の中では、「京都ホーム」以来の同志社女学校の教育及び経営の責任者は女性宣教師 (代表1名) と位置付けられ、'principal' または 'head' と記述されている。しかし、日本側の正式文書における校長は新島襄なので、括弧付きで表記している。
- (10) Anna Young Davis (1851-1944) 『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校 (1876年-1893年)』下巻, 2-13 参照。
- (11) Virginia Alzaid Clarkson (1850-1940) 前掲書, 18-26 参照。
- (12) Florence White (1845-1931) 前掲書, 26-34 参照。
- (13) James Levi Barton (1855-1936) バーモント州生まれ。ミドルベリー大学、ハートフォード神学校で学ぶ。トルコ宣教から帰国後、N. G. Clark の後任として1894~1927年アメリカンボードの Foreign Secretary (幹事) を務めた。1895年、同志社問題調査のためにボード本部から派遣され来日した委員の一人。晩年は近東地域への人道支援活動でも知られた。
- (14) D → B, 1899/9/15, *Asphodel* 52 (2017), 87.
- (15) D → B, 1900/3/30, *Asphodel* 52, 92.
- (16) D → B, 1900/3/30, *Asphodel* 52, 92. Alice Pettee Adams (1866-1937) はニュー

ハンブシャー州生まれ。1891年来日し岡山ステーション所属となり、1936年の定年まで45年間、岡山の貧民街、花畑に建つ「博愛会」事業に献身した。

- (17) 松田幸（1876-1940）は山口県生まれ、1894年同志社女学校普通科卒。デントンの鳥取伝道を短期間助けたのち、東京でケーベルにピアノを師事。デントンと同船で渡米し Mills College 及び New England Conservatory of Music で音楽の修行。1901年ベルリンに渡り4年間、女性ピアニスト、イエドリックの指導を受けて帰国。荒木和一と結婚した後も、夫妻でデントンと親交を結んだ。豊田谷子（?-1911）は愛媛県生まれ、1893年同志社女学校邦語科卒。卒業後は松江でミス・ナッシュ（聖公会）の伝道を助け、1897年よりデントン所属の番町教会キングスレー館で働く。デントンの鳥取伝道にも同行。デントンと同船でハワイ到着後はホノルルの婦人夜学校及び小学校で教えた。1903年帰国。
- (18) 参 考 記 事： *The Japan Weekly Mail*, 1900/3/24, 297-98; *The Hawaiian Star*, 1900/3/31, 2 & 5; *Evening Bulletin*, 1900/4/3, 2; *ibid.*, 1900/4/10, 8; *The Independent*, 1900/4/10, 3; *San Francisco Call*, 1900/4/18, 7.
- (19) 1900年6月実施の合衆国国勢調査、及び *San Jose City Directory* による。なおこの年の国勢調査にデントンの記録もあってしかるべきだが、発見できていない。
- (20) D → B, 1900/3/30, *Asphodel* 52, 93.
- (21) オレゴンでの宿泊先は、まず Mrs. James Steel 宅 (*Morning Oregonian*, 1900/5/2, 8)、次に Mrs. John A. Bell 宅 (*Sunday Oregonian*, 1900/5/13, 14)。
- (22) D → B, 1900/3/30, *Asphodel* 52, 92。デントンがワシントンとオレゴンで数週間過ごす間に、彼女の旅程作成に関連して、Mrs. Dodge (WBMP の Treasurer) は50通以上の手紙を書いた (*Pacific* 39, 1900/9/27, 17)。
- (23) D → B, 1900/6/21, *Asphodel* 52, 93.
- (24) B → D, 1900/7/9, *Asphodel* 52, 101。その後、2回目 B → D, 1900/12/21, *Asphodel* 52, 116、3回目 B → D, 1901/2/9, *Asphodel* 53 (2018), 179 と注意している。
- (25) *Pacific* 24, 1900/6/14, 16-7。同じ文章が3ヶ月後の *L&L* (1900/9, 425) にも掲載。
- (26) *Pacific* 37, 1900/9/13, 20.
- (27) D → B, 1900/6/21, *Asphodel* 52, 93.
- (28) D → B, 1900/7/21, *Asphodel* 52, 103.
- (29) ① *Asphodel* 52, 110. ② *ibid.*, 113-4. ③ *Asphodel* 53, 176. ④ *ibid.*, 193.
- (30) *Pacific* 40, 1900/10/4, 19.
- (31) *Pacific* 49, 1900/12/6, 18.
- (32) *Pacific* 16, 1901/4/18, 15.
- (33) ボストンまでの旅費は WBMP が支払うべきとのパートンの主張に対し、デントンはとことん反対した。① B → D, 1901/2/9, *Asphodel* 53, 179. ② B → D,

- 1901/2/11, *ibid.*, 180. ③ D → B, 1901/2, *ibid.*, 183-4. ④ D → B, 1901/2/22, *ibid.*, 185. ⑤ B → D, 1901/2/26, *ibid.*, 189.
- (34) D → B, 1901/3/23, *Asphodel* 53, 191. Daniel Willis James (1832-1907) は英国リバプール生まれ。エディンバラ大学1年の時、母(アメリカ人)と死別。それを機に渡米し実業界で成功、慈善事業にも尽力した。アーモスト大学・ユニオン神学校の理事を務め、多額の寄付をした。晩年はニュージャージー州マディソンに別宅を持ち、同市の偉大な後援者となった。
- (35) D → B, 1900/9/28, *Asphodel* 52, 110.
- (36) *New Orleans Item*, 1901/4/16, 3; *The Boston Globe*, 1901/4/17, 14.
- (37) D → B, 1901/3/28, *Asphodel* 53, 193.
- (38) 1900年6月の合衆国国勢調査で、日本生まれの「Matsuda Ko」の名前が Mills College 校長の世帯に記載されている。“United States Census, 1900”, database with images, FamilySearch (<https://www.familysearch.org/ark:/61903/1:1:M9P9-PY1:9 March 2022>), Ko Matsuda in entry for Susan Mills, 1900.
- (39) ‘Music and Missions’ 記事の要旨は、海外伝道における音楽の重要性を指摘し、今後、各種伝道委員会で積極的にこのテーマを取り上げる必要を述べたものである。その中に、ボストンの New England Conservatory of Music では「海外伝道の見地から、伝道地の生徒をすでに受け入れている」との一文があったため、デントンは松田幸の入学を思いついたのであろう。
- (40) James Henry Deming Ross (1851-1907) ニューヨーク州生まれの会衆派牧師。College of New Jersey (現プリンストン大学) を 1874 年卒業後、プリンストン神学校、さらにアンドーバー神学校に学ぶ。牧会で大きな成果をあげた後、ジャーナリズムの世界に転身、一般紙を通してアメリカン・ボード活動の周知に貢献した。賛美歌学の権威で、その分野の著書多数。
- (41) Walter Frear (1828-1922) ニューヨーク州生まれ、1851年イエール大学卒。アンドーバー及びユニオン神学校等で学んだのち長老派の按手を受け、1855年カリフォルニアへ赴任。1862年会衆派に転会。1870～1881年はハワイで牧会した。1892～1903年、アメリカン・ボードの太平洋沿岸担当 (Agent on the Pacific Coast) を務める。
- (42) B → D, 1900/8/2, *Asphodel* 52, 107.
- (43) Edward Danforth Hale (1859-1945) ニューヨーク州生まれの音楽教育家。ニューイングランド音楽院で教授を務める。1900年ごろ雑誌 *The New England Conservatory Magazine* に “Music Pedagogy” 「音楽教育」というコラムを定期的に執筆。
- (44) *L&L*, 1901/7, 307.
- (45) *Springfield Republican*, 1901/5/30, 8.

- (46) B → D, 1901/3/30, *Asphodel* 53, 195.
- (47) *L&L*, 1901/8, 358.
- (48) Charles Herbert Daniels(1847-1914) ニューハンプシャー州生まれ。1870年アーモスト大学、1873年ユニオン神学校卒。牧師接手後いくつかの州で牧会したのち、1888年にニューヨーク市のアメリカン・ボード地域主任（District Secretary）となり、1893～1903年はボストン本部で Corresponding Secretary を務めた。
- (49) *Pacific* 37, 1901/9/12, 15; *L&L*, 1901/11, 520.
- (50) *The San Francisco Call*, 1901/9/21, 5; *Evening Bulletin*, 1901/9/27, 8; *The Japan Weekly Mail*, 1901/10/12, 389-90.
- (51) *Pacific* 43, 1901/10/24, 16.
- (52) D → B, 1900/6/21, *Asphodel* 52, 93-94.
- (53) D → Child, 1900/8/9, *Asphodel* 52, 108-10. Abbie B. Child [Abigail Bullock Child] (1840-1902) はマサチューセッツ州生まれ。ABCFMのPrudential Committeeの中心役員を11年間務めた父の感化で、本人もWBMの創立時から30年以上、会長Mrs. Bowkerを助け、幹事として働いた。のみならずアメリカ中の女性伝道団体のリーダーとしても活躍し、国内外の伝道関係者から慕われた。WBMの機関誌*L&L*の編集に終生携わった。
- (54) D → B, 1900/9/28, *Asphodel* 52, 110.
- (55) B → D, 1900/10/2, *Asphodel* 52, 112.
- (56) D → B, 1900/7/21, *Asphodel* 52, 104.
- (57) D → B, 1900/12/14, *Asphodel* 52, 113-4。この一件の展開は *Asphodel* 52, 177, 180, 182, 183 の書簡に見える。
- (58) *Los Angeles Herald*, 1901/4/7, 3.
- (59) Daniels → D, 1901/7/25, *Asphodel* 53, 197-8.
- (60) D → B, 1899/9/15, *Asphodel* 52, 86-7.
- (61) B → D, 1899/11/11, *Asphodel* 52, 90.
- (62) D → B, 1901/3/23, *Asphodel* 53, 191-2.
- (63) B → D, 1901/4/3, *Asphodel* 53, 196.
- (64) *Pacific*, 1901/4/18, 15.
- (65) *Pacific*, 1901/10/17, 15.
- (66) 最も密接な関係があったのは、郷里のグラスバレー時代からの友であるヘンダーソン姉妹だった。1900年9月下旬から1901年3月下旬までデントンの連絡先、あるいは書簡の発信地となっているロサンゼルスダウンニー通り813番地（813 Downey Ave.）は、Miss Janet & Mary A. Hendersonの住所である（*Los Angeles City Directory*。両名とも教師）。デントン家とヘンダーソン家はともに4人姉妹で年齢が近く、何人かは同じ学校に通い、教職を目指したことで共通点

が多かった。

- (67) *Los Angeles Herald*, 1901/3/2, 12.
- (68) 出典は、順に *Corvallis Gazette*, 1900/6/5, 3; *Marin Journal*, 1900/6/28, 6; *San Francisco Chronicle*, 1900/6/30, 14; *San Diego Union and Daily Bee*, 1900/9/28, 5.
- (69) *Daily Record*, 1900/9/3, 4.
- (70) デントンはアメリカに向かう船の中から、数年前に日本から送った幻灯機用スライドが使えるか否かの確認と、現地への送付をパートンに依頼している (D → B, 1900/3/30, *Asphodel* 52, 92)。実際にパートンがボード太平洋沿岸担当のフリーア宛に送付するのは7月となった。それまでの講演でデントンが用いたスライドはどこから入手したのかは不明。あるいは今回の旅で持参したものがあつたのかもしれない。
- (71) この項の出典: *Morning Oregonian*, 1900/5/4, 7; *Los Angeles Herald*, 1900/12/10, 3; *San Jose Mercury News*, 1900/8/29, 7; *Los Angeles Times*, 1901/3/8, 17.
- (72) *Morning Oregonian*, 1900/5/9, 12.
- (73) *Morning Oregonian*, 1900/5/7, 5; *ibid.*, 1900/5/8, 7; *Corona Courier*, 1900/10/6, 1.
- (74) *Mankato Free Press*, 1901/7/26, 4.
- (75) Florence White James の墓碑は以下のサイトで見るができる。
<https://www.findagrave.com/memorial/149903989/florence-james>
- (76) ニュージャージー州出身の Dr. Willis N. Whitney (1854-1918) が 1883 年、東京の赤坂氷川町に設立。1920 年代に活動停止するまで、眼科・内科の医院として施療活動も行った。支援先にこの病院の名前が挙げたのは、デントンが提供した情報に拠るものと見られる。
- (77) *San Jose Mercury News*, 1901/10/6, 16; *ibid.*, 1911/9/19, 9. テイバー夫人 (Mrs. Anna F. Taber 1827-1911) の遺言の内容は *Will Books and Probate Records, Ca. 1850-1912* で確認。なお、夫人は北カリフォルニア先住民協会サンノゼ支部の会長も務め、デントンの妹エマ (Emma Hapgood Denton、愛称 Happy。先住民居留地で奉仕中、1899 年 1 月に死亡) をよく知る立場にあつた (*The Indian's Friend*, 1899/3)。

主要参考文献

- 同志社女学校同窓会『同志社女学校期報』8-17, 1897/6-1901/12、同志社女学校
 同志社々史料編集所編『同志社九十年小史』同志社、1965
 同志社社史史料編集所編『同志社百年史』通史編 1、同志社、1979
 同志社女子大学総合文化研究所編『総合文化研究所紀要』10 巻、同志社女子大学総合文化研究所、1993

M. F. デントンの第1回賜暇休暇（サバティカル）1900/3～1901/9（坂本・八木谷）

同志社女子大学史料室編、坂本清音編著、J. W. カーペンター訳『女性宣教師「校長」時代の同志社女学校（1876年-1893年）——アメリカン・ボード宣教師文書をベースにして』上下巻、同志社女子大学、2010、2012

同志社女子大学英語英文学会『*Asphodel*』52-53, 2017-2018

Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions, UNIT 3, Missions to Asia, 1827-1919 (Far East), reel 368, Woodbridge, c1984-1985, microfilm.

Woman's Board of Missions ed., *The Life and Light for Woman*, 1898-1901

The Congregationalist, 1900/4/26

The Pacific, 1900-1901

利用したサイト名（URLは略）

* 歴史的新聞

California Digital Newspaper Collection, Chronicling America, GenealogyBank, Historic Cambridge Newspaper Collection, Historic Oregon Newspapers, Newspaper Archive, Newspapers.com, Washington Digital Newspapers.

* 書籍、公文書、地図、墓碑データベースなど

Ancestry, FamilySearch, Find a Grave, Google Books, HathiTrust Digital Library, Internet Archive, Library of Congress.

なお、上記のサイトから得た情報の利用は執筆者の責任において行った。